

論 文

1980年代～1990年代の日本文学の 中国語訳の史的研究

張 貴 生

広西大学外国学院講師

A historical study of the Chinese translation of Japanese literature
from the 1980s to the 1990s

Zhang Guisheng

Abstract: From the 1980s to the 1990s, Japanese literature translation in Chinese flourished unprecedentedly. Starting with the study of Japanese literature and the translation of Japanese literature, the study of Japanese literature and its translation status in the new period are discussed in this paper. Also, the achievements and existing problems of Japanese literature translation are stated in this paper. The translation of classical Japanese literature and literature of various schools in modern and contemporary Japan are further explored through the perspective of history, the great situation of the translation of Japanese literature in this period is revealed in the study. Therefore, readers understand the spread and influence of Japanese literature in China in this period.

Key words: Japanese literature, Chinese translation, classical literature, modern literature

一. はじめに

中国改革開放の発展に伴って、外来の文化も以前より多く取り入れられてきた。隣国の日本文学も例外なく中国人に関心を持たれている。そのため、中国の出版社は中国人読者のニーズに応じて日本文学作品を大量に翻訳・紹介した。それは日本への理解を深める中国人にとって重要なことであるといえる。日本文学の研究やその翻訳がどういう状況なのか、どれほどの業績をあげているのか、日本文学の研究や翻訳においては、どういう問題があるの

か、ということを明らかにすることが必要である。本稿は史的な視点から日本文学の研究や、古典文学作品及び代表的な近代諸流派の文学作品の翻訳を探究し、この時期の日本文学の翻訳の盛況を論ずることとする。

二. 日本文学の研究とその翻訳の状況

(一) 新時期日本文学の翻訳

改革開放後、社会・経済・文化など高度期に突入した中国では、日本文学も未曾有の繁栄時期に入ったのである。長年の文化的閉鎖状態を脱出した人々が外の世界を見る願望を強く持っており、読書の重要性をも意識している。だが、書物なしという現象は改革開放の当初に深刻な問題になっている。一方、「文化大革命」期間における文学創作は思想的欠如や無味乾燥で大分時代遅れとなったため、外国文学の翻訳やその出版に巨大な市場や千載一遇のチャンスを与えられた。1980年の初めごろから1987年にかけて中国では長く続いた日文学ブームがあった。そのブームの原因が複雑であるが、上述の要因以外ほかの理由があると考えられる。日文学の読者から見れば、改革開放になって、中国と日本は政治・経済・文化において密接な関係を保持している上に、経済においても日本の資金・技術・製品なども中国に流れ込んできた。日本の物質的文化に数多く接触した中国人はより深く日本文化・文学を知りたいことを求めるのが理の当然である。1992年までにまだ世界著作権条約に加盟していない中国は日文学を含めて諸外国文学を自由に翻訳できたと同時に楽に特殊な機会を利用できる出版社も刺激された。調査によるとその時、日文学の翻訳は印刷数が何十万部にも達していることがよくあったそうである。このような経済的効果は中国の各出版社には魅力的なものである。それで人民文学出版社をはじめ、上海訳文出版社や黒竜江・吉林・遼寧の人民出版社や文芸出版社、作家出版社、中国文聯出版社、湖南人民出版社、海峡文芸出版社なども日文学の翻訳事業に大いに寄与した。1980年代、日文学作品の翻訳は年に70種類も出版されていた。その中で1985年から1989年の間までは発行量が一番高いこの期間は年平均100種類もあったと見られている。単行本のみならず、日文学翻訳叢書も発行された。1980年代の初めから1990年にかけて人民文学出版社によって発行された代表的な「日文学叢書」に、「源氏物語」、「平家物語」及び夏目漱石、芥川龍之介などの作品、古今日文学名著が約20種類収録されている。1980年代後期、近代

名家名作出版方針の下で上海訳文出版社によって刊行された第二弾の「日本文学叢書」に、夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、有島武郎、永井荷風、佐藤春夫、太宰治などの重要作品が10何種類収録されている。1980年代中頃からその末期までは、海峡文芸出版社を主導に七つの出版社によって出版された「日本文学流派代表作叢書」（編集主幹、李芒）に翻訳作品が10何種類収められている。

1980年代後半から日本文学の翻訳はあらゆる文学の翻訳と同様にブームが下火になって軟調状態にあった。中国では、日本文学の翻訳界で大きな影響力を持って、唯一の日本文学の翻訳と研究の刊行物として吉林人民出版社によって創刊された「日本文学」も1987年の年末で廃刊となった。1980年代後半になって経済的インフレが顕在化し、政治的「左翼」が優勢を占め、「資産階級自由化」を外国文学の翻訳とは無理に結びつけた人さえも出てきた。それは外国文学の翻訳・出版に消極的な影響を齎したのである。1993年に「世界知的所有権機関条約」(Universal Copyright Convention)と「ベルヌ条約」(Berne Convention)に加盟したばかりの中国は著作権を購買するメカニズムの不健全やそのルートの閉鎖のため、中国での日本文学の翻訳・出版が量的に下がっている。ブックマーケットの低迷や渉外著作権の制約ということで翻訳出版への要求も高まってきたようである。逆に考えれば、それは文学題材の選択、更新、最適化には有利であるし、訳文の質の向上をも促進できるといえる。1995年前後になって日本文学の翻訳に継続発展の余地が訪れ、そしてこの前と異なる特徴が現れた。翻訳の重心は名家名作や流行作品だけでなく、出版の形態も単行本から文集化、シリーズ化へと移行されていた。さらに書籍の印刷も装丁も質的に大いに高まっていた。名作家では、葉渭渠らによって編集された「川端康成文集」、「三島由紀夫文学シリーズ」、「大江健三郎作品」といった先頭があって日本文学の翻訳は盛況を迎えている。流行作家作品では、林少華訳の「村上春樹作品シリーズ」や、文化芸術出版社などによって刊行された「渡辺淳一作品」と推理小説が大きなセールスポイントで、読者の人気も集まっていた。1980年代から1990年代までの日本文学翻訳盛況が二つの方面に現れていた。一つは、翻訳の量から見れば、ここ20年間日本文学の訳本は1400種類ほど(重訳を含む)で21世紀の総訳本である2千種類余りの三分の二を占めており、翻訳1種類は平均印刷数1万部にするなら、1400万部にも達している見込みである。ロシアや、ソ連、

アメリカ、フランス、イギリスといった文学大国に比較すれば、日本文学の翻訳がほぼ同様である。「1980～1986年翻訳出版外国文学著作目録と提要」¹によるとここ七年間で日本文学の訳本が約560種類であり、量的にロシア、ソ連、英国、米国、フランスに次いで第五位を占めているということである。一つは、この時期では日本文学は古代文学から当代最新文学に至るまで、その題材選択の系統性、全面性においては前代未聞であると言っていいであろう。古典文学の翻訳において最大の業績を収めていた。数多くの古典名著は1950年代から1960年代の間まで出版計画され、訳された作品もあったが、「文化大革命」が原因で、「源氏物語」、「落窪物語」（以上豊子愷訳）、「万葉集」、「古今和歌集」（以上楊烈訳）、「平家物語」（周作人等訳）及び銭稻孫訳の近松門左衛門の作品と井原西鶴の小説など、1980年代になって出版できたのである。

このように、ここ三十年間のうち、日本古典文学中で一流と思われる名著には全て中国語訳の訳本があった。さらに二流またはその以下とされる名著が殆ど中国語訳されたばかりでなく、異なる二つ以上の訳本も刊行された。明治維新後の近現代文学の翻訳はこの時期に大きな成果を取った。今まで訳出されていない重要作家作品の訳本も出たし、既訳の作品に新訳されたものもある。二十年間の努力で、夏目漱石、志賀直哉、有島武郎、谷崎潤一郎、芥川龍之介、川端康成、大江健三郎、阿部公房などのように、日本近現代文学名家の作品、特に重要なものが殆ど系統的で全面的に訳出された。

（二）日本文学の翻訳及び日本文学の研究

翻訳界で活躍している翻訳家たちはこの時期の目立った特徴である。1980年代までは、豊子愷、銭稻孫、周作人、尤炳圻、亡くなったこれらの翻訳家の遺作は1986年以後出版された。1930年代～1940年代、楼適夷、林林、葛祖蘭、韓侍桁などのように有名になったベテランの翻訳家は80年代になっても高水準の翻訳作品が世に出されたのが連続している。1950年代～1970年代、劉振瀛、李芒、文潔若、葉渭渠、唐月梅のような、訳壇に上がった翻訳家は新时期日本文学翻訳の中堅や統率者として活躍している。和歌・俳句を翻訳した李芒、日本諸名家名作を訳した文潔若、川端康成・三島由紀夫・大江健三郎・安部公房などの作品を訳出した葉渭渠・唐月梅といった翻訳家たちは大きな貢献をした。1980年代後、楊烈・申非・李樹果が訳した日本古典

文学、陳徳文が訳した島崎藤村の小説、特に日本散文、金中が翻訳した石川達三の作品、李正倫が訳した日本映画文学の脚本、于雷・金福・鄭民欽・呉樹文・柯毅文・柯森耀・林懷秋・包容などが訳した近現代名作シリーズ、これらの翻訳家によって訳出された日本文学の佳作・名作が中国で多くの読者に人気がある。

半世紀にわたって翻訳家の実践や探求により、この時期の日本文学の翻訳は言葉の表現、文体、訳し方といった技巧や技術的な問題が基本的に解決されたと考えられる。日中・中日の辞書が大量に出版されたことで日中翻訳が言語表現において規範化してきた。経験豊かな訳者が訳文の上で自分の風格を持っているとはいえ、現代中国語が成熟かつ定着したため、名訳と呼ばれる訳文の殆どが現代中国語の文法や適切な言葉遣いに合致しているわけで、特に中青年の優秀な訳文はそうである。今まで古語・口語文混交や和文式の表現が見えなくなった。それは1920～1960年代の訳本と異なって、個人の翻訳スタイルは翻訳家自身の中国語表現に現れたのではなく、起点テキストの総体スタイルに基づいて如實的に再現されたのである。いわゆる「直訳」と「意識」の区分が不明確になってきて、翻訳家たちも標準的な、中国語らしい中国語で起点テキストを表現できる道や方法が見付かったようである。しかしながら、この時期日本文学翻訳に携わる膨大な翻訳者は素養が千差万別で日本語学者が多かったし、その中で現代中国語や中国文学の教養或いは中国語への審美的感受性が欠如している者も少なくないというので、言葉使いが貧弱であり、語構成も単調であった。訳文として原文の意味が分かっているにもかかわらず中国語の表現が無味乾燥で語句の意味がよく通らない。その内容は目を通すだけならいいようであるが、よく推敲すれば誤訳などが頻出しており、翻訳のスタイルや味とは言えないというのが問題視されている。翻訳作品が倍増したので、販売利潤の追求を目的にした訳本の中で作品の選択であれ、訳文であれ逸品が足りない。いわば「可読性」を求める大量の、平凡で低劣な作品が若干翻訳された。同時に質の悪く、粗製である訳文がこれまでのどの時期よりも多い。これは逸品が続出する時代でもあり、欠陥品が絶えない時代でもあるといえる。

日本文学の翻訳と相まってこの時期は日本文学の研究が大きな進歩を遂げた。まず中国では1972年の中日国交正常化後、日本文学史の紹介やその研究が慎重に日本学者の著した日本文学史著作の訳出からスタートした。代表的

な著作として1976年に上海人民出版社によって刊行された、日本で著名な日本文学史家である吉田精一の著した「日本現代文学史」(齊幹訳)は平明で洗練され、観点の権威性があるという特徴で、日本で好評を博しているのである。もう一部は1978年に人民文学出版社によって刊行された「日本文学史—日本文学の伝統と創造」(佩珊訳;西郷信綱ら著、厚文社1953)はマルクス・エンゲルスの歴史唯物主義を指導思想に、異なる時期の各日本社会階級力量の盛衰を、文学史発展を左右する決定的な要因だと思っている。日本社会歴史の史実に基づいて書かれたこのような文学史は独特な学術的価値を持っていると見られている。

そのほかに、1983年上海訳文出版によって出版された「戦後日本文学史・年表」(羅伝開・柯森耀・周明・呉樹文訳;松原新一・磯田光一・秋山駿著、講談社1979)という日本当代文学史は戦後日本文学の思潮、流派、代表的な作家作品などを深く分析研究した。1986年に北京人民出版社によって刊行された「日本近代文学史話」(卞立強訳;『物語日本近代文学史』、中村新太郎著、新日本出版社1974)は平易な表現、奥深く豊かな内容、大きな紙幅で知られている文学史である。作者は日本近現代文学の発展過程をはっきり述べていた以外、重要作家の作品も詳細に鑑賞していた。さらに二十、三十年代のプロレタリア文学が重要視され、より多く評論された。1978年に東北師範大学出版社によって発行された「日本文学史概説」(倪玉、繆偉訳;市古貞次著、秀英出版1959)は実際日本文学史の綱要だといえる。1989年三聯書店によって刊行された「日本戦後文学史」(李丹明訳;『戦後文学史』、長谷川泉著、明治書院1974)は簡略で10万字足らずの小冊子である。1992年に訳林出版社によって「近代日本文学思潮史」(鄭欽民訳;長谷川泉著、至文堂1961)も出版された。上記の各種日本文学史の翻訳出版で中国の読者に日本文学に関する知識を提供された上に、日本文学に対する中国学者の関連研究も促された。

1982年に外語教学与研究出版社によって日本語で書かれた大学日本語専門学生用の「日本文学史」(王長新著)が、同年10月に「日本戯劇概要」(王愛民、崔亜南編著)が出版された。この概要では古今の日本演劇発展の概況を紹介され、重点作家の代表作品を分析された。1983年、1986年に学林出版社出版の「日本俳句史」、「日本和歌史」(彭恩華著)では日本民族独特の詩歌様式を持った俳句と和歌の形成、発展及び変容を紹介し、また名家名作も中

国語訳された。また1980年代に「日本無産階級文芸運動簡史」(劉柏青編著、時代文芸出版社1985)、「日本文学史」(呂元明著、吉林人民出版社1987)というような日本文学論や文学史も世に出された。これは中国学者が独自に書いた中国語版の文学通史である。

日本当代文学論文集の「戦後日本文学」(李徳純編、遼寧人民出版社1988)。上記の著作から見れば分かるように、1980年代に中国では日本文学史の紹介や研究が初歩、草創及び繁栄という階段にあるといえる。1990年代にになって次のような新しい日本文学史著作が出版された。「日本現代文学史」(陳徳文著、南京大学出版社1991)、「日本文学簡史」(雷石榆著、河北教育出版社1992)、「日本文学概説」(李均洋著、陝西人民教育出版社1992)、「日本漢詩発展史(第一巻)」(肖瑞峰著、吉林大学出版社1992)、「日本当代文学史綱」(平猷明著、遼寧教育出版社1993)、「日本文学史話」(劉振瀛著、商務印書館出版1995)、「日本当代文学研究」(何乃英著、北京師範大学出版社1997)、「日本文学史」(馬興国著、春風文芸出版社2000)。

1990年代に日本文学研究の分野で一番成果が多いのは葉渭渠、唐月梅である。両氏の訳した「日本文学史序説上下巻」(加藤周一著、開明出版社1995)は数多くの日本文学著作の中では、広い文化視野、比較文化や比較文学の視角、独特の文学史の区分とその組立てということによく知られている。「日本現代文学思潮史」(葉渭渠・唐月梅著、中国華僑出版社1991)と「日本古代文芸思潮史」(葉渭渠著、中国社会科学出版社1996)の外に、「日本文学思潮史(古代文学と近現代文学の合巻)」(葉渭渠著、経済日報出版社1997)も刊行された。「二十世紀日本文学史」(葉渭渠・唐月梅著、青島出版社1998)は二十世紀外国国別文学史叢書の一つとなっている。2000年に「日本文学史」(葉渭渠・唐月梅共著、経済日報出版社)の近代巻・現代巻が、2004年に「日本文学史」(著者同上、昆侖出版社)古代巻(上下)・近古巻(上下)が刊行された。これは今迄紙幅が最大で、内容がもっとも豊富で資料の十全な文学史であり、両氏の日本文学史研究の集大成でもありと思われる。こんな大規模で水準が高い日本文学史の大作は中国で空前のものだけでなく、日本でもなかなか見られないことであるといえる。2000年までで中国では翻訳出版された日本文学史が10種類近く、中国学者自身に書かれたものが10種類余りで、合わせて20種類余りとなっている。

1980～1990年代の間、各種刊行物に日本文学に関する評論、鑑賞及研究

などの文章が毎年30～100本ほど発表された見込みである。「日本文学」、「日語学習と研究」の外に、中国社会科学院主催の「外国文学評論」、北京大学主催の「外国文学」及び「中国比較文学」、「外国文学研究」のような文学研究類学術刊行物もある。さらに「吉林大学紀要」、「東北師範大学紀要」、「北京師範大学紀要」などの紀要類にも日本文学研究や中日比較文学研究の論文がよく登載されている。

(三) 日本文学研究の業績及び諸問題

日本文学研究や作家作品の評論においても大きな業績が収められていた。翻訳家李芒の「投石集—日本文学古今談」(海峽文芸出版社1987)、劉振瀛の「日本文学論集」(北京大学出版社1991)が学術価値ばかりでなく、1950～1980年代の中国日本文学研究やその評論の進展も反映されていた。呂元明の「日本文学論叢」(東北師範大学出版社1992)、「被遺忘的在華日本反戦文学」(吉林教育出版社1993)、葉渭渠の「日本文学散論」(吉林人民出版社199)、「李徳純の「愛・美・死—日本文学論」(中国社会出版社1994)などに各自の学術力と研究特質が見えてきた。

作家別の研究やその評伝は、「川端康成評伝」(葉渭渠著、中国社会出版社1989)、「三島由紀夫研究」(葉渭渠編、開明出版社1996)と「不滅之美—川端康成研究」(中国文聯出版社1999)、「三島由紀夫伝」(作家出版社1994)、「日本現代文壇巨匠夏目漱石」(中国社会出版社1998)のように高い学術価値を持っている著作があげられた。中日文学比較研究に関しては、「魯迅:在中日文化交流的座標上」(彭定安編、春風文芸出版社1994)、「魯迅与日本文学」(劉柏青著、吉林大学出版社1985)、「中日古代文学關係史稿」(嚴紹璽著、湖南文芸出版社1987)、「近代中日文学交流史稿」(王曉平著、湖南文芸出版社1987)、「仏典・志怪・物語」(王曉平著、江西人民出版社1990)、「中国現代作家与日本」(靳明全著、山東文芸出版社1993)、「中日現代文学比較論」(王向遠著、湖南教育出版社1998)、「“筆部隊”与侵華戰爭—対侵華文学的研究与批判」(王向遠著、北京師範大学出版社1999)、「日本近代文芸思潮与中国現代文学」(孟慶枢編、時代文芸出版社1992)、「中日比較文学研究」(趙楽性経編、吉林大学出版社1990)、「中日比較文学論集」(于長敏・宿久高編、吉林大学出版社1993)、「中日文化交流大系・文学卷」(嚴紹璽著、中西進編、浙江人民出版社1996)、「中日近現代文学關係比較研究」(張富貴・靳叢林著、吉

林大学出版社 1999) など、以上の多彩な著作は学術開拓性に富んだ力作であると見られている。

全体的に見れば、日本文学史や日本文学の研究は数多くの成果が収められたが、その研究や評論に関する問題は少なくないと考えられている。日本文学の研究は言語障壁を有しているため、一般的な紹介内容であっても「研究」と看做されるのが普通である。日本人研究者の観点を権威とした大多数の文章は日本の学術観点への論証や肯定を趣旨とし、中国学者の独立思考に欠けており、研究の際批判精神の足りない研究者が作家作品への評価も高いほうであると伺えた。さらに、発表された文章や、訳本の序言は日本作家作品を販促するコマーシャルのように思われている。王向遠 (2007)² では、二三十年代の場合に比較して分かるように、大量の訳本序言には、個性的な、独特な訳者の悟性を見せた、独立的な判断及び文才に富んだものが極少なく、内容に乏しく紋切り型の文章となったというのがこの時期日本文学の翻訳や紹介における短所であったと指摘している。

三. 日本古典文学の翻訳

和歌や俳句の中国語訳に関しては、多く議論がされている。日本独自の短詩—和歌の漢訳が難しく、翻訳不能だと思う人が多かった。1920年代から周作人や銭稻孫などが、上代から日本に行われた定型の歌で固有の様式や音韻を持つ俳句や和歌を訳出してみた。それは日本古典詩の漢訳実務において参考になるものとなっている。1979年改革開放後、日本文学研究界で日本古典文学作品の翻訳や紹介を推進したとともに、日本古典詩の翻訳理論やその方法についても討論されている。

和歌といえば、現存最古の歌集の『万葉集』(20巻)を避けて語ることができないと言える。日本文学史上では中国文学史上における『詩経』に相当する地位だと考えられる。中国の翻訳者に重要視されたその編集は、一人または数人の協力により一貫した方針に基づいてなされたのではなく、前人の収集を入手して増補整理するという形で、長い年月にわたり数回に及んでなされたもので、最終の整理者が大伴家持であることはほぼ確実である。『万葉集』の編まれるころ、まだ平仮名や片仮名はなかったため、文章はもちろん歌も全部漢字で書かれている。漢字が日本に渡ってきて長い年月を経ているので、当時の知識人はこれを相当自由に駆使することができた。それで『万

葉集』の用字法は複雑で、現在でも万葉の歌に改訓が繰返されていることの重要な原因になっている。

1956年銭稻孫訳の『漢訳万葉集』（三百首）が日本で刊行された。1984年楊烈（1912～）全訳の『万葉集』は湖南人民出版社によって刊行された。1992年銭稻孫訳、文潔若が整理した『万葉集精選』は中国文聯出版公司によって出版された。1998年10月李芒訳の『万葉集選』が人民文学出版社で刊行された。上記の三種訳のスタイルはそれぞれの特徴を持っているが、高い鑑賞的且つ文献的価値は認められているものである。さらに『古今和歌集』（略称『古今集』）の翻訳も注目が集められている。『古今集』の歌風は、『万葉集』の「ますらをぶり」に対し「たをやめぶり」といわれ、知的で繊細巧緻な詠法に特色が認められる。そのうち、和歌は、心情表現はこれまでに類例がなく、当時としては新しい内容の和歌とみられていた。人の心を種とし、それを言葉で表現したものであり、天地鬼神をも感動させる機能を有するとする所論と、六歌仙批評とは、後世の歌学歌論に多大の影響を与えた。1983年楊烈訳の『古今和歌集』は上海復旦大学出版社によって刊行された。1986年中国で最初の『日本和歌史』も彭恩華訳で、上海学林出版社によって出版された。当該の本には日本の和歌を大量に引用し翻訳したものが多く、末尾に「古今和歌一千首」（日中対照）が付録している。

和歌以外の俳句翻訳については、日本俳句集の訳出が出ており、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句を選らんで、1983年林林（1910～）訳の『日本古典俳句選』は湖南人民出版社で出版された。また、葛祖蘭（1888～1988）訳の『正岡子規俳句選』が上海訳文出版社によって刊行された。正岡子規（1867～1902）は俳人・歌人として、和歌の趣向の変化を求めて、理屈を排し、客観写生の重視を説くなど、強い自信と決意にあふれており、子規の和歌革新の第一声になり、歌人としての子規の出発点ともなった。経験を平明に客観的に書く写生文も提唱して、後世の平易な日本語の成立にも少なからぬ影響を与えた。子規の平明、簡潔な達意の叙事文が、口語文体の上に革新をもたらしたことは特筆すべきである。

古典俳句だけでなく、現代俳人の作品も1990年代から翻訳された作品が少なくない。1993年刊行された『赤松恵子俳句選』（李芒訳、中国社会出版社）、1995年刊行された『藤木俱子俳句・随筆集』（李芒訳、中国社会出版社）、1994年から1995年にかけて刊行された『和歌俳句叢書』（李芒主幹編集兼訳者、

南京訳林出版社)に金子兜太³、加藤耕子、赤松唯などの俳句が訳載されている。

1980年代、日本俳句の翻訳紹介が進められることに従って、中国で「漢俳」と呼ばれる新しい詩体が生まれた。漢訳俳句とも呼ばれる。俳句の五七五の形式に倣い、五・七・五と17字の漢字を3行に並べ、季題を入れ、韻を踏んだ有季定型による新しいスタイルの詩だと思われている。1980年5月、日中友好協会の招きに応じて、大野林火を団長とする俳人協会一行が訪中した際、初めて中国に「漢俳」の詩型が生まれた。以降、全国に着実にファンを増やしており、90年、5月には、杭州大学に「中国全国和歌俳句研究会」が結成された。

物語、散文及び戯曲文学の翻訳も盛んに行われていた。代表として、『源氏物語』の漢訳を取り上げることができる。

この物語は平安中期のもので、紫式部作、五四帖から構成されている。長保3(1001)以後の起筆とされるが、成立年未詳である。主人公光源氏の愛の遍歴と栄華を描き、やがて過去の罪の報いを知り苦悩の生涯を終える前半と、暗い愛の世界を描いた宇治十帖とよばれる後半から成る。仏教的宿世観を基底に、平安貴族の憂愁が描かれて、後世の文芸に与えた影響も多大である。1950年代から外国文学名著翻訳として計画された『源氏物語』は銭稻孫(1887～1966)⁴の訳した第1巻が「訳文」(「世界文学」)に刊行された。銭稻孫の『万葉集』翻訳は、『万葉集』を世界各国の言語に翻訳しようとしていた佐佐木信綱の目にとまり、佐佐木の依頼によって銭稻孫は『万葉集』の漢訳作業にたずさわった。翻訳事業は1940年にはじまり、佐佐木が訳すべき歌を選んで、銭稻孫が翻訳し、それを市村瓊次郎が校閲するという方式で行われた。1944年に完成する予定だったが、戦争の激化によって連絡がとれなくなってしまった。戦後の1955年に再び連絡がとれるようになり、すでに故人となっていた市村にかわって鈴木虎雄が校閲に加わった。1959年に『漢訳万葉集選』として日本学術振興会から出版された。佐佐木が選んだ280首ほどに、銭稻孫が自ら選んだ二十数首を加えた311首(『詩経』の篇数と同じ)が含まれている。『漢訳万葉集選』には銭稻孫の序、佐佐木信綱の縁起・新村出の後語・吉川幸次郎の跋がついている。中国では銭稻孫の訳稿をもとに文潔若が編集した『万葉集精選』が1992年に出版された。『万葉集』の中国語訳は銭稻孫以前に1920年代の謝六逸が数篇を翻訳しているが、銭稻孫のものはそれより

もずっと量が多かった。また、謝六逸は口語自由詩で訳しているのに対し、銭稻孫は文語で、とくに『詩経』に似た文体で訳した。鄒双双によると、銭稻孫自身が文語になじみが深かったこと、読者対象として中国人だけでなく日本人を意識したことによるという。1961年から1965年にかけて豊子愷(1898～1975)⁵が訳した『源氏物語』は人民文学出版社によって三巻を分けて刊行された。その後、『竹取物語』、『伊勢物語』、『落窪物語』も訳出した。1984年『落窪物語』というタイトルで人民文学出版社によって「日本文学叢書」として刊行された。

さらに、軍記物語の『平家物語』の漢訳もこの時期翻訳の上で特筆すべきことである。この物語は平家一門の栄華とその没落・滅亡を描き、仏教の因果観・無常観を基調とし、調子のよい和漢混濁文に対話を交えた散文体の一種の叙事詩。平曲として琵琶法師によって語られ、軍記物語・謡曲・浄瑠璃以下後代文学に多大の影響を及ぼした。鎌倉時代から明治、大正、昭和に至るまで国民文学として各階層に親しまれたから、この影響を受けた作品は数えきれない。こういった作品の翻訳は日本歴史の変容や、異なるタイプの物語文学、その影響を受けた後代文学を理解する上で必要なものである。『平家物語』は本巻が12巻、「灌頂巻」と名づけた別巻が1巻あってすべて13巻である。全本は周作人、申非共訳で、1984年「日本文学叢書」の一つとして人民文学出版社によって世に送られた。翻訳された際、読者が深く読めるように日本学者の諸注釈を参考にして、多数訳注を付されている。

日本古典散文の翻訳も「文化大革命」が始まる前に完成した。平安中期の随筆の『枕草子』は一条天皇の皇后藤原定子に仕えた清少納言(生没年未詳)が、自由な形式で宮廷生活の体験・見聞・感想などを記したもの。長短三百余りの章段からなり、そのいずれにも著者の鋭い審美的感覚をうかがうことができる。各章段は内容により日記的章段、類聚的章段、随想的章段に分類される。文章は軽妙で変化に富み、描写は簡潔・的確である。『源氏物語』と並び平安女流文学の代表的作品であると考えられている。1988年周作人訳で『日本古代随筆選』の一つとして人民文学出版社によって刊行された。

もう一つの鎌倉時代の随筆『徒然草』(吉田兼好著)は随想や見聞などを書きつづった全244段(一説では243段)からなる。無常観に基づく人生観・世相観・風雅思想などがみられ、枕草子とともに随筆文学の双璧とされる。中国では日本文学を熟知し、『徒然草』を重視した文学者や翻訳者である周作

人、郁達夫はその部分を翻訳した。1925年周作人が訳出した『徒然草』の14段は「語絲」⁶に発表された。1936年郁達夫が訳した1、3、5、6、7、8段は「宇宙風」⁷（第十期）に発表された。翻訳者王以鏞（1925～）が1960年の初めから、典雅簡素で分かりやすい古文で翻訳を始め、1970年中ごろでそれを完成させた『徒然草』は1988年人民文学出版社によって刊行された。

中国建国後、日本古典戯曲の翻訳として取り上げるのが近松門左衛門の作品である。近松門左衛門（1653～1724）江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎作者で、越前の人である。本名、杉森信盛で、別号、巢林子である。坂田藤十郎のために脚本を書き、その名演技と相まって上方歌舞伎の全盛を招いた。また、竹本義太夫のために時代物・世話物の浄瑠璃を書き、義太夫節の確立に協力した。代表作は『国性爺合戦』『曾根崎心中』『心中天網島』『女殺油地獄』『傾城仏の原』などである。1950年代、1960年代銭稲孫が訳した近松門左衛門の作品は『曾根崎鴛鴦殉情』（「曾根崎心中」）、『情死天網島』（『心中天網島』）、『景清』、『俊寛』がある。古典戯曲の翻訳に貢献した訳者は申非（1920～）という人もいる。1980年申氏が訳した『日本狂言選』が人民文学出版社によって刊行された。1985年申氏が訳した『日本謡曲狂言選』は「日本文学叢書」として人民文学出版社によって出版された。謡が能から独立して、素謡として演奏され、鑑賞され、あるいは稽古されるようになったのは、主として江戸時代以降のことで、謡のテキストである謡本の出版はおびただしい数に上った。謡曲指南の役者も増え、現代も謡を稽古する人が多い。申非のほかに劉振瀛の訳した世阿弥の『熊野』も1985年に「日本文学」⁸（季刊第1期）に発表された。

古典文学翻訳の中で、江戸時代の通俗文芸の翻訳・紹介が重要な地位を占めている。江戸の前期、「仮名」という名称からも、貴族的「真名」に対する近世的・庶民的性格は明らかである。当時は仮名書きの書物をすべて仮名草子と称したが、厳密には中世後期小説と井原西鶴（1642～1693）の『好色一代男』以後の浮世草子との間に介在する近世前期小説として規定すべきで、その立場からいえば、隨筆、案内記、評判記以下多くのものが除外される。しかし今日、一般的には、当該時期の読者を対象とし、多少とも文芸性を有するものを、広く仮名草子として扱っている。仮名草子は、啓蒙的・教化的分野や、娯樂的分野、実用的分野などに分けられるが、一作品で諸性格をあわせもつものが多い。江戸中期より後期まで出版された絵入り小説、赤本、

黒本、青本、黄表紙、合巻を総称する「草双紙」は、江戸町人大衆の好尚に密着して成長発展した点で内容的にも多種多彩であり、浮世草子の内容を継承したものもみられ、文学史的・文化史的に重要な意義をもっている。また、江戸市民にしか通用しなかった洒落本や黄表紙が、全国的に通用するテーマや題材を擁する大衆的な戯作も出てきた。

江戸中期から後期にかけての小説の一形態として山東京伝（1761～1816）に代表される「洒落本」は遊里に取材し、遊客遊女などの姿態言動を、会話を主とした文章で、簡単な筋の中に写實的に描き、また遊里風俗記、遊興論などの体裁をとることもある。最初は漢学の素養のある人たちが、中国の艶史（遊里文学）などにならって漢文体で書きなぐったような遊戯的な文章から始まったものだと思われる。寛政（1789～1801）の後半になって式亭三馬、十返舎一九、梅暮里谷峨などの洒落本における活躍がみられ、遊里の「うがち」よりも人情を主とし、男女の恋愛・真情を複雑な筋の中に描く傾向が強くなって長編化せざるを得ず、読本と融合した、為永春水（1790～1843）がリードする「人情本」という小説形態となって解消する一方、その細かい写実の技法は「滑稽本」に受けつがれることになった。

本来画本・実用書などに対する娯楽読物の本を意味するとする「読本」における作品は中国白話小説に傾倒してその様式的移植を試みた点に大きな意義をもつ。それに伴って、叙述性、知的構構性、思想性、伝奇性などの諸特質と、和漢混交雅俗折衷の文体を有する。それらは中国古典白話文学の翻案またはその影響下にある作品だと見られている。代表的な作家は江戸中期の浮世草子、読本の作者上田秋成（1734～1809）、江戸時代後期の読本の作者滝沢（曲亭）馬琴（1767～1848）である。

江戸時代の市井通俗小説と思われる上述のものは中国で翻訳紹介された作品に「浮世草子」、「滑稽本」、「読本」を取り上げることができる。1950年代から江戸時代市井小説翻訳の出版が計画された。滑稽小説では1950年から1960年にかけて周作人によって訳された式亭三馬作の『浮世澡堂』（「浮世風呂」）が刊行された。この小説は江戸町人の社交場であった銭湯を舞台に、客の会話を通じて世相・風俗を描いたもので写実性に富み、滑稽味豊かな作品である。1989年周作人訳の『浮世澡堂』と『浮世理髪店』（「浮世床」）の合巻が人民文学出版社によって刊行された。1980年代後、井原西鶴の『浮世草子』、上田秋成、滝沢（曲亭）馬琴の「読本」も次第に出版された。

中国では注目されたのは江戸前期の俳諧師、浮世草子作者の井原西鶴(1642～1693)作品の翻訳である。井原の作品はよく雅俗語を折衷、物語の伝統を破って、性欲・物欲に支配されて行く人間性を生き生きと見せ、元禄前後の享楽世界を描いた好色物、義理堅い武士気質を描写した武家物、町人の経済生活を描いた町人物などに特色がある。1682年(天和2)刊、浮世草子の最初で、好色本の始祖、主人公世之介1代の色欲生活に関する短い説話を連ね、大坂・江戸・京都などの女色・男色の種々相を活写した『好色一代男』、女主人公の長い生涯の中に女性の淪落の経緯を叙した『好色一代女』、1686年(貞享3)刊、お夏清十郎・樽屋おせん・おさん茂右衛門・お七吉三・おまん源五兵衛の愛欲生活を描いた『好色五人女』(1687)で、敵討話を内容とする『武道伝来記』、町人たちの致富に対する逞しい意欲と盛衰の物語である『日本永代蔵』、大晦日を背景とする町人生活の悲喜哀歓を描いた短編集である『世間胸算用』、諸国の怪異奇談を収めた説話文学である『西鶴諸国ばなし』(1686)、二十四孝を振って、不孝者が天罰を受ける話を集めた『本朝二十不孝』、『西鶴織留』、俳諧に『大句数』、『西鶴大矢数』など、数多くの傑作を残した。

1950年代から銭稻孫が井原西鶴作品の翻訳を始めた。1987年人民文学出版社によって『日本致富宝鑑』(『日本永代蔵』)、『家計貴在精心』(『世間胸算用』)が刊行された。1990年『五个痴情女子的故事』(『好色五人女』;王向遠訳、上海訳文出版社)には、他に『一個蕩婦的叙述』(『好色一代女』)、銭稻孫訳の作品と同じで、訳名が異なる『日本致富経』(『日本永代蔵』)、『处世費心機』(『世間胸算用』)が収録された。1994年王啓元・李正倫訳、山東文芸出版社によって出版された『好色一代男』と題する小説集に『好色一代男』の外に、『好色一代女』、『好色五人女』も原作名のまま収められた。また、1996年上述の作品は単行本として桂林灑江出版社によって刊行された。

「読本」の翻訳であるが、江戸中期の浮世草子、読本作者、国学者、歌人である上田秋成の『雨月物語』や『春雨物語』は1990年代から「日本文学叢書」の一つとして翻訳出版が計画された。全五巻九編から構成された怪談小説集『雨月物語』はいずれも中国小説、とくに白話(口語体)小説の影響下に成り、説話の緊密な構成に特徴があるが、作者の怪異に対する鋭い感覚が加わり、また原作を翻案するにあたっては日本古典の豊かな知識をもってこれを迎え、はるかに原作をしのぐものとなっている。わが国の怪異小説の最

高峰である。

『春雨物語』も簡潔にして雄勁な文体をもって、歴史や伝承の中の古代的な幻想を主題とし、主知的でありながら、自由であざやかな独特の言語世界を構築したところに、時代を越えた新しさがみられ、同時に人間探究の深まりが感じられる。またそれは仏意、儒意に汚染されることのない、日本人本来の生き方を探ろうとする熱意からきたものでもある。こうしてそれは国学研究の成果が、物語の形を借りて提示されたものといってよく、やや難解ではあるが、すぐれた作品となっている。1990年閻小妹訳、『雨月物語』と題してその中に『春雨物語』も収められた訳本が人民文学出版社によって刊行された。

さらに、曲亭馬琴作、日本の伝奇小説である『南総里見八犬伝』（王樹果訳）も1991年に南開大学出版社によって刊行された。仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八つの徳目を象徴する八犬士が、運命の糸に操られながら里見家の臣となり、よく外敵を防いで功名を坂東にとどろかすというもので、波瀾万丈のストーリーに加え、構想の完璧と雄大さを誇る長編史伝物の代表作である。中国伝奇小説の雄編『水滸伝』を根底に置いたもので、雄大な伝奇の世界に読者を導く構想の華麗、壮大さは、日本伝奇小説中の白眉たることに間違いはないと考えられている。

四. 近代諸流派作家作品の翻訳

(一) 明治前期の諸流派作家作品の翻訳

1980年代から今まで触れられなかった明治前期の文学翻訳の穴を埋めようとする人民文学出版社では下記の作家作品が次々と刊行された。「硯友社」⁹を結成し、口語文体を創始し、写実主義の可能性を深め、心理的・社会的な主題を追究した小説家・俳人尾崎紅葉（1867～1903）、繊細優雅な文体で、独特の浪漫的境地を開いた泉鏡花（1873～1939）、尾崎紅葉と並ぶ作家で、のち考証・史伝・隨筆に新境地を開いた幸田露伴（1867～1947）、『不如帰』『自然と人生』によって認められてトルストイに心酔して社会的視野をもつ作品を書いた徳富蘆花（1868～1927）、社会運動に奔走し、日露戦争には非戦論を唱え、社会主義文学の代表作といわれる反戦小説「火の柱」を発表し、またキリスト教社会主義を説いて「新紀元」を創刊した木下尚江（1869～1937）、島崎藤村らと雑誌「文学界」を創刊し、近代ロマン主義の先駆者である北村

透谷（1868～1894）、文芸に造詣深く、「しからみ草紙」を創刊したと同時に西欧文学の紹介・翻訳、創作・批評を行い、明治文壇の重鎮となる森鷗外（1862～1922）などがそれである。

1983年尾崎紅葉の『金色夜叉』（金福訳）は上海訳文出版社によって刊行された。この小説は明治の社会では資本主義社会への発展過程において、金銭欲、物質欲を肯定する風潮をめぐる諸問題が表面化した。この作が広範な読者を心酔させたのも主題がこの問題の大水脈を突いたからである。高等中学生の間貫一は許婚の鳴沢宮を愛していたが、宮は資産家の富山唯継に嫁すことになり、裏切られたとして悲憤した貫一は学業を廃めて、逆に自己を金力の鬼、すなわち金色の夜叉と化して高利貸の手代となり、社会に報復する。紅葉はこの一作で金力の世界を肯定せず、人間の愛情、友情、献身、社会正義の優位を世に訴えた。訳された作品は中国の読者には大人気があった。

1990年人民文学出版社の企画で「日本文学叢書」が世に送られた。文潔若訳、泉鏡花の『高野聖僧』（『高野聖』）が叢書のシリーズとして刊行された。人間、社会を見る彼の眼を鋭くし、下層階級の生活者の意外な人情の厚さを知り、上層階級の偽善的虚栄心への反抗の念を植えつけた。処女作『冠弥左衛門』（1892）や『義血侠血』（1894）など、そうした精神のあらわれである。これが観念小説をはじめ、彼の文学の一底流をなしている。1895年4月、「文芸倶楽部」¹⁰に載った『夜行巡查』、6月同誌収載の『外科室』の二作は、日清戦争後の新文学要望の声にこたえ、世俗の道徳や通念に批判的な主張を提出したものである。観念小説の名称を得た。また、『高野聖』（1900）、『女仙前記』（1902）、『湯島詣』（1899）、『婦系図』（1907）、『歌行灯』（1910）、『薄紅梅』など、謡曲・浄瑠璃・読本・合巻などの影響を受け、神秘的なロマン主義精神に貫かれた独自の作品が多い。20世紀初頭の自然主義の隆盛におされ、文壇的に不遇の時期もあったが、その作風は後の多くの作家に影響を与えている。前掲した文潔若訳の『高野聖僧』には、他に『外科室』、『湯島之恋』（『湯島詣』）、『和歌灯』（『歌行灯』）、『琵琶伝』（1896）、『瞌睡看守』（1899）が収録されている。

また、『日本文学叢書』には、文潔若訳、人民文学出版社によって幸田露伴（1867～1947）作の、神秘的な構想と調子高い文体で理想の恋を詩的に歌った短編小説『風流伝』が初刊行された。『風流伝』（明治22刊）を発表した幸田露伴は天才露伴子の名が定まった。幼時、私塾で『孝経』の素読を受けた

し、菊池松軒の漢学塾で程朱の学を学んだ。理想主義的傾向をもつ擬古典派に属し、紅葉と並び称された。のち考証・史伝・随筆に新境地を開いた。第一回文化勲章受章で、小説『五重塔』・『風流微塵蔵』・『運命』・『連環記』、評釈『芭蕉七部集』など、著作を多数残している。1980年代の初めから幸田の作品が中国で紹介され、翻訳された。1983年劉振瀛訳、男性的な、壮大な意力美、理想美の世界がひらかれた短編小説『鍛刀記』（原作『一口剣』）は中国青年出版社によって刊行された『日本短編小説選』に収録されている。一代の名作と評価される『五重塔』（文潔若訳、中国科学出版社1981）は『世界文学』に掲載された。その作品はまた『五重塔—日本中短編小説選』（文潔若訳、江出版名社1987）に収められている。1990年『五重塔』と新訳した『風流伝』の合巻で『風流伝』と題されて人民文学出版社によって刊行された。『五重塔』は、鈍重な性格ゆえに「のっそり」とあだ名にされる大工十兵衛は、谷中感応寺の五重塔建立の計画を知って末代にわが名をとどめる好機と奮い立ち、先輩の川越源太から仕事を奪い取る。源太の俠気に満ちた協力の申し出も拒み、さまざまな妨害をはねのけて、あくまでも独力で塔を建てた。落成式の前日、暴風雨に襲われるが、塔は微動だにしなかった。芸道に精進する男の意地と執念という露伴独自の主題を、西鶴に学んだ雄渾な文体で描いた傑作で、とくに結末のすさまじい嵐の描写は圧巻である。

20世紀に訳出された日本文学の中に徳富蘆花（1868～1927）の作品が多く見られている。その中で春風文芸出版社や人民文学出版社によって刊行された家族制度の悲劇を扱った家庭小説『不如帰』（1898）の訳本が日本文学の中国語訳で一番多いほうだと思われる。1983年陳徳文訳、天津百花文芸出版社によって出版された、文学的に質も高く、日本人の感情教育に役立つ『自然と人生』は作者初期の小説・評伝・随筆などを収録し、汎神論的自然観がうかがえる。文範として当時の文章に影響を与えて読者に好評を博した。1993年陳徳文が『順礼紀行』（1906）、『みゝずのたはこと』（1913）など、徳富の散文集・随筆集の中から若干作品を選択し、『徳富蘆花散文選』と編訳した。1994年再度百花文芸出版社によって出版された。「国民新聞」¹¹に連載した、藩閥政治に反抗する旧幕臣を主人公に、当時の上流社会の腐敗と墮落とを描く『黒潮』（1902）も1959年金福訳、上海文芸出版社によって刊行された。出版後、中国で大きな反響を呼んだその訳本が1978年から1980年にかけて二度再版されたほどである。社会批判性が強くて、人間悲劇の原因を社

会にありとする作家の観念が露骨に表明されているこの長編小説は広津柳浪の「悲惨小説」、泉鏡花らの「観念小説」と似通っている。その外に、木下尚江作、1904年「毎日新聞」に連載され、日露戦争前後の、社会の虚偽不正をあげき、非戦論を唱えるキリスト教社会主義者による反戦運動を描いて日本社会主義文学の先駆的作品である『火柱』（『火の柱』；尤炳圻訳、上海訳文出版社1982）が刊行された。1910年6月、大逆事件の主謀者にでっちあげられて投獄され、秘密裁判で死刑宣告された幸徳秋水以後、この事件から衝撃を受けた作家が多くなり、世界の植民地支配の深刻な現実、その争奪戦における帝国主義の本質を、社会主義の立場から鋭く批判したものや、侵略戦争への強烈な反対論を唱える作品が絶滅状態になるほど少なくなった。思想傾向が重要視された中国改革开放初期、『黒潮』と『火柱』のような日本文学作品を選択・翻訳されたのは当然であると思われる。

浪漫主義作品の翻訳であるが、詩人、日本近代初期浪漫派の評論家、平和主義運動者である北村透谷（1868～1894）の、詩や評論のような作品が1980年代から中国で少しずつ翻訳・紹介された。1985年中国では初翻訳出版された北村の詩集『蓬莱曲』（蘭明訳、上海訳文出版社）に日本最初の革命的ロマン主義の長詩であり、また日本最初の自由律長詩である『楚囚之詩』（1889）と劇詩『蓬莱曲』（1891）が収録されている。『楚囚之詩』は政治犯として獄中にある「余」の孤独な思念を歌い、自由民権運動挫折後の透谷の内面的葛藤を投影した代表作である。『蓬莱曲』であるが、蓬莱山はつまり富士山の麓・中腹・絶頂を舞台に設定、現世を捨ててここに来た気性鋭い内攻的な青年に、大魔王が自分こそこの世の物質的な繁栄を支配していると同時にその破滅をも支配している、と告げ、自分に服従せよというが、青年は大魔王に屈服しないで富士山頂に死ぬ。明治浪漫派初期の主要作の一つであり、青年は作者透谷のおもかげを宿している。この作の主題は現代、特に戦後の日本の社会事情にも通じるところがある。

浪漫主義文学の先駆として、もう一人の作家森鷗外が取り上げられる。1988年隋玉林訳、『舞姫』と題した森鷗外の小説集は「日本文学流派代表作叢書」の浪漫主義の巻として浙江文芸出版社によって出版された。小説集には『舞姫』（1890）、『泡影記』（『うたかたの記』1890）、『信使』（『文づかひ』1891）『遊戯』（『あそび』1910）、『山椒大夫』（1915）、『沈黙之塔』（『沈黙の塔』1910）、『情死』（『心中』1911）、『青年』（1910）、『雁』（1911）、『魚玄機』

(1915)、『高瀬舟』(1916)、『最後一句話』(『最後の一句』1915)、『寒山拾得』(1916)、『護持院空地的復讐』(『護持院原の敵討』1913)、『佐橋甚五郎』(1913)など十五篇の短編小説が収録されている。前掲された小説集には浪漫主義文学とはいえども、『舞姫』などのような作品において、『最後の一句』などのように歴史小説に属しているものもある。ロマン題材の小説にはロマンティックな香りの高い悲恋の物語や、漂わせた哀愁味、現代社会に取り組んだ多くの興味深い問題を盛り込まれている。歴史題材小説では史実を重んじ、その史実に潜む歴史の必然性を分析し、過去を客観的に再現する方法で『興津弥五右衛門の遺書』(1912)、『阿部一族』(1913)、『護持院原の敵討』(1913)のような作品を発表した。また、史実の束縛から自由でありたいと『山椒大夫』、『高瀬舟』、『寒山拾得』等の「歴史離れ」の諸作も発表した。その中で上述した『興津弥五右衛門の遺書』、『阿部一族』は森鷗外の中国語訳小説集に収録されていない。なぜかという、これらの作品によって鷗外が、日本の保守支配階級の、文化的、精神的な面における最も有能な一参謀と見られたし、封建的イデオロギーもまだ鷗外の内部にあったと見えてきて、改革開放の中国情勢には合わないと考えられるからであろう。

(二) 自然主義作家作品の翻訳

この時期の作家作品の翻訳から見れば、原作の重訳と、今まで中国語訳されてない新訳に分けることができる。訳本の代表として、「社会」の陰湿な体質が描き出されており、家族制度の抑圧からの解放を願う藤村の内的欲求と、差別に対する抗議という社会正義の問題とが結び付いたリアリズム小説として、大きな反響をよび、藤村の作家的地位を確立するとともに、日本の自然主義文学の出発点となった島崎藤村(1872～1943)の『破戒』(1906)や、自然主義作品としての位置づけをされた田山花袋(1871～1930)の『綿被』(『蒲団』1907)が挙げられる。1950年尤炳圻(平白)訳の『破戒』が平明出版社や人民文学出版社によって刊行された。1982年『破戒』(柯毅文・陳徳文重訳)が「外国文学名著叢書」として、人民文学出版社によって刊行された。1987年黄鳳英・胡毓文訳の『綿被』が「日本文学流派代表作叢書」として江蘇人民出版社によって出版された。

新訳された自然主義作品は重要な日本作家の代表作が殆どであると見られている。ツルゲーネフやゴンクール「印象描写」を取り入れ、花袋自身の

従軍の体験と、日露戦争下の日本の底辺にいる青年の姿を客観的にとらえようとした長編小説の『田舎教師』（1909）や、日本の半封建的な家族制度の内部に焦点を絞り、両旧家の12年間にわたる没落過程を通じてその陰湿な論理を浮かび上がらせた、自然主義文学の傑作である島崎藤村の『家』（1910）、自伝小説の性格を現し、その中に夫婦関係についての自然主義的解釈を含めている長編小説の『春』（1908）、自然主義作家として、50年の創作経験を積んだ最後の到達点として描いた徳田秋声（1871～1943）晩年の傑作である『縮図』（1941）及びその他の中短篇小説、正宗白鳥（1879～1962）の短篇小説などがある。

徳田秋声の『縮影』（『縮図』）は1982年「二十世紀外国文学叢書」として力生（呉力生）訳、上海訳文出版社によって刊行された。叢書における自然主義の巻は『新婚家庭』（『新世代』1908）と題して徳田秋声と正宗白鳥の合巻から構成されている。その中に『新婚家庭』、『町頭舞場』（『町の踊り場』1933）、『抗争』（1915）（以上徳田秋声の作品、郭来舜訳）、『塵埃』、愛情も期待もなく、失望も幻滅もない新婚生活を描いて、その虚無的な気分が新鮮だとの好評を得た『泥娃娃』（『泥人形』1911）、女の本能や性格が自分の運命を決定してゆく姿が、細かく描かれ、ある種の女性の立体像を巧妙に刻んでいる『激光』（『微光』1910）、『臭牛棚』（『牛部屋の臭ひ』1917）（以上正宗白鳥の作品、紀太平訳）が収録されている。これらの作品を通じる白鳥文学の特色としては、批評精神が強く、知性が感情をおさえて働くために、描写を説明に代え、造型せずして観念化する傾向と、イデーが先立って、それを彼独特の主観的雰囲気に入れこませる方法とが目立つ。

自然主義作家の中で多く中国語訳されたのは島崎の作品である。『破戒』は本格的な自然主義小説の代表であり、『家』は自然主義の到達した頂点であり、『新生』は告白小説の典型である。作者が、事業でも、恋愛でも、時代に先んじたため、青年の悲哀を味わった長編小説『春』（1908；陳徳文訳、福建人民出版社1983）、由緒ある二つの旧家の没落する過程をたどり、家族制度の因習や宿命的な血の問題を描く『家』（1909；陳徳文訳、江蘇人民出版社1981）が挙げられる。『家』は日本の「家」の構造を外から傍観的にとらえるのではなくて、人間関係の内部から息苦しいまでに緻密な描写と文体で写し取っている。自然主義リアリズムの頂点を示す傑作である。1994年『千曲川素描』（『千曲川のスケッチ』；陳徳文訳、百花文芸出版社）が刊行された。藤

村はフランス、ドイツ、ロシアの自然主義思潮の洗礼を受け、「写生文」と呼ばれる散文を試作した。「写生」は元来中国における絵画についての用語であるが、明治時代にスケッチもしくはデッサンの訳語とされたのを、日本の洋画家の示唆のもとに文芸に移し入れた。「写実」とほぼ同義に使い、実物、実景をありのままに具象的に写すべきことを唱える。

『強靱な意志と激しい情熱をもち、父祖の狂熱を自覚する故に、道徳的に身を持ち、自作を一つとしてゆるがせにせず、最大限の完成をめざした。その多くは近代的自我の完成をたどる自伝小説ではあったが、普通の生活者として特殊な自己の実生活から普遍の相を汲み取り、これに深く徹することで、代表的な日本の庶民の文学たらしめた。

(三) 耽美派と白樺派の翻訳

中国では、1930年代から耽美主義文学（唯美主義ともいう）が流行り始めた。日本では、永井荷風、谷崎潤一郎、佐藤春夫らがこの流派の強力な支柱となった。こうして耽美主義は、明治末から大正5、6年にかけて、文壇の主流であった。若き耽美派の集会「パンの会」は、年を追って盛んであった。一九世紀後半のヨーロッパに出現した文芸思潮で、美の創造を唯一無上の目的とする創作態度をいう。フランスのボードレール（仏語 Charles-Pierre Baudelaire）¹²、イギリスのペイター（Walter Horatio Pater）¹³、ワイルドなどに代表される。耽美主義者は一般に、自然を排して人工を重んじ、思想よりも感覚を重んじ、類型をきらって独創を尊び、道徳の規範を脱して美の自律性の頭場につとめる。だから、耽美主義はしばしば悪魔主義に偏し、ダンディズムに流れた。

日本の耽美主義文学の中で、1980年代になって中国で紹介・翻訳された谷崎潤一郎（1886～1965）の作品が一番多いと考えられる。第二次大戦中に起稿、官憲の干渉で中絶し、戦後に完成した『細雪』（1946～1948）は大阪船場生れの美しい四人姉妹の生活と運命とを描く。伝統的な日本美を現代に生かした風俗絵巻で、作者の文学観を具体化した代表作である。1980年代になって刊行された『細雪』（周逸之訳、湖南人民出版社1985；儲元熹訳、上海文芸出版社1989）は二つの訳本が出た。他に次のような作品も中国訳されている。

偏愛される足を持つ女と、足を偏愛する男たちの姿を描いた『富美子の脚』

(『富美子の足』1919;白欧訳、上海曉星書屋 1931;章克標訳、三通書局 1943)、皮膚や足に対するフェティシズムと、それに溺れる男の性的倒錯など、その後の谷崎作品に共通するモチーフが見られる初期の作品である『刺青』(1911;章克標訳、『谷崎潤一郎集』に収録、開明書店 1929)、谷崎文学の、マゾヒズムによる女性拝跪の極致がみられる『春琴抄』(1933;張進等訳、湖南人民出版社 1984)、同性の魅力のとりこになった人妻とその夫の破滅劇を、その人妻が大阪弁で告白する異色の長編として注目されて、モダニズムから古典回帰へと移行する時期の重要な作品で自伝的要素も濃いと思われる『各有所好』(『蓼喰ふ虫』1928;鄭欽民訳、「谷崎潤一郎作品集」<長編小説巻1、葉渭渠編集主幹>に収録、中国文聯出版社 2000)、アメリカの風潮が生んだモダン・ガールの生態を描いた風俗小説として評判になり、「大正末期の眼あたらしい一種の男女及びその男女関係が一巻の風俗画として精密に出来上った」(佐藤春夫)と問題視された『痴人之愛』(『痴人の愛』1924;楊騷訳、上海北新書局 1928;郭来舜・戴璨之訳、陝西人民出版社 1988;鄭欽民訳、「谷崎潤一郎作品集」<長編小説巻1、葉渭渠編集主幹>に収録、中国文聯出版社 2000)、「谷崎文学のあらゆる要素の総合であり、最高の結晶である」(亀井勝一郎)と絶賛された谷崎文学の傑作『少将滋幹之母』(『少将滋幹之母』1949;林水福訳、聯合文学出版社有限公司 2008;竺家榮訳、上海訳文出版社 2011)、「性」を大胆に描いた問題作として話題になった『鍵』(『鍵』1956;林水福訳、聯合文学出版社有限公司 2006;竺家榮訳、上海訳文出版社 2010)、世間的には決して結ばれない二人の主人公だったが、悪者に唆され墮落してしまう。果てしなく墮落してしまう男女で、お艶を救おうとして新助はやむなく人殺しをしてしまうストーリー『殺艶』(『お艶殺し』1915;章克標訳、上海水沫書店 1930)、女性同士の同性愛をテーマとした『卮』(1928～1930刊;竺家榮訳、上海訳文出版社 2010)、主人公の母親への近親姦願望を扱った、谷崎晩年の一作『夢浮橋』(『夢の浮橋』1959;林水福訳、聯合文学出版社有限公司 2009)、息子の嫁に性欲を覚える不能老人の性倒錯(脚フェティシズム)が身辺雑記の日記形式で綴られた作品『瘋癲老人日記』(1961～62;竺家榮訳、上海訳文出版社 2010)、強迫観念、学生生活、勉強する気が出ないこと、失敗・病氣・死・発狂の恐怖、性と欲望と不健康な興奮など、精神医学の世界に見られる多くの神経衰弱の要素が詰め込まれて描かれている『悪魔』(1913;査士元訳、華通書局 1930)。

1992年北京三聯書店によって刊行された「日本文化叢書」の一つである谷崎の散文集『陰翳礼賛—日本与西洋文化隨筆』には、日本美の再発見に言及した『陰翳礼賛』(『陰翳礼讚』1933;孟慶枢訳、河北教育出版社2002)の外、『論懶惰』、『恋愛と色情』、『厭客』(客ざらい)、『漫話旅行』、『關於廁所』が収録されている。『陰翳礼讚』は光と影の美しさが、特に影、陰、闇に潜む美しさの賛美が読まれた時、そんな質感や空気感へのこだわりを随所に感じるエッセー・評論である。木や肌の質感に対するこだわり、室内の暗さへのこだわり、旅で得られる安らぎへのこだわり、トイレに対するこだわり等である。

永井荷風(1879～1959)は日本の耽美主義に理論的基礎を与えた代表の一人である。中国では小説集や散文集の翻訳集が見られている。1988年四川人民出版社によって「日本文学流派代表作叢書—唯美主義卷」として刊行された『舞姫』には下記の小説が収録されている。

隅田川の向こう玉の井の私娼窟を探訪し、そこに素材を得た『墨東綺譚』(『墨東綺譚』1937;謝延荏訳)、隅田川に還らぬ江戸の面影を見出し、淡い恋愛をからめて、懐旧の情を叙情豊かにつづる『墨田川』(『すみだ川』1909;林少華訳)、戦後浅草のレビュー劇場を題材にして、ダンサーと演奏者の2人所帯に金沢から妻の奔放な妹が転がり込んだことから起こる騒動を活写した『舞女』(『踊子』1945;胡徳友訳)、ロマンティックな香気と鋭い批評精神が、独自の個性的魅力を発揮し『ふらんす物語』と並んで、初期の代表作である『美国的故事』(『あめりか物語』1908;程文新訳)、『勳章』(『勳章』1945;謝延荏訳)、『華街上的風波』(宋再新訳)である。

1990年李遠喜訳、漓江出版社によって「外国文学名著叢書」として刊行された『争風喫醋』に『墨東綺譚』、『雨瀟瀟』(1921)、女のヒモとして生きる男たちの姿などを非情に描き出した昭和期の作品を生んだ『梅雨前後』(『つゆのあとさき』1931)などが収録されている。

1994年譚晶華・郭潔敏訳、上海訳文出版社によって「日本文学叢書」として刊行された『地獄之花』(『地獄の花』1903)に『墨東綺譚』、『梅雨前後』、『墨田川』、『積雪消融通』、『兩個妻子』などが収録されている。

1999年陳薇訳、作家出版社によって刊行された『永井荷風選集』にエロチックな描写を含むが、季節の推移と融け込んだ年中行事や風俗の描出に別趣の詩的な味わいがある『較量』(『腕くらべ』1916)、『雨瀟瀟』、『墨東綺譚』、

『歓楽』（1909）が収録されている。

1997年陳徳文訳、「外国名家散文叢書」として百花文芸出版社によって刊行された『永井荷風散文選』に、『荷風隨筆』（野口富士男編、岩波書店1994）における『断腸亭日記』、『日和下駄』（晴日木履）、『ふらんす物語』（1909）、『あめりか物語』、『断腸亭雜藁』という永井の散文集から選出されたものが収録されている。

自然主義文学に対抗、エゴ（自我）を大胆に肯定し、旧習にとらわれない雰囲気横溢、行き詰まった明治の文壇の天窓をさわやかに開け放った『白樺』は1910年4月、有島武郎、武者小路実篤、志賀直哉らが創刊した。有島武郎（1878～1923）は年長同人として重んぜられる。白樺派の諸作家は、自己の個性を普遍的な人類の代表者とみなし、人間解放の選手をもって自任する点において、自然主義の延長上にあるとあってよい。1984年謝宜鵬訳の『葉子』（『ある女』1919）が湖南人民出版社によって刊行された。1991年「日本文学流派代表作叢書」として福建海峡文芸出版によって刊行された『一個女人的面影』（『ある女』）に『宣言』（1915）、『星光』（『星座』1922）が収録されている。『ある女』は前後編2冊で、前編の初稿『或る女のグリンプス』は、1911年1月から1913年3月までは『白樺』に断続的に連載された。内部の衝動のままに生きたがゆえに孤立し、それでも止むことなく生きようとした人間の姿が悲劇的に描かれ、また前編に顕著な対社会的な問題意識もみられ、「日本のリアリズム文学の最高作品」（本多秋五）と評される作品である。

白樺派のもう一人の代表作家は、強烈な自我意識と簡潔・明晰な文体によるリアリズム文学の傑作を書いた志賀直哉（1883～1971）であるが、中国では1930年代、1950年代に志賀の中短篇小説が訳されたことがある。1956年楼適夷訳『志賀直哉小説集』が作家出版社によって刊行された。1981年楼適夷訳、湖南人民出版社によって刊行された『牽牛花』と題した隨筆・短篇小説集は前掲の小説集から自分の訳した短篇を取り出した小説以外、殆どが新訳である。

1985年、長編小説『暗夜行路』（1921～1937；劉介人訳、湖南人民出版社；孫日明・梁近光・梁守堅訳、瀛江出版社；李永熾訳、海南出版社2017）は刊行された。この小説は『改造』¹⁴に断続連載した。前編は1922年新潮社刊で後編は1937年改造社の『志賀直哉全集』に収録された。志賀没後の岩波

書店版全集に大正初期に始まる構想時からの草稿を収めた。近代文学史の中では、その成立、完成に極めて複雑な経緯を持つ傑作の一つであると思われる。美と倫理の一致を見事に達成したこの作品に対して、同時代及び後代の作家、評論家も盛んに論評、近代文学史上屈指の代表作としての誉れが高い。

有島、志賀の他に、白樺派で小説家、劇作家、詩人、画家である武者小路実篤（1885～1976）の作品は、中国の改革解放後、それほど注目されなかったが、1920年代から1940年代にかけて盛んに翻訳・紹介されたのである。彼はトルストイに傾倒し、1910年4月志賀直哉らと雑誌「白樺」を創刊、個の拡充、主体的な生の創造を大胆に打ち出す感想・評論を執筆、また西欧の美術の紹介に努めた。のち人道主義の実践場として「新しき村」¹⁵を建設した。

1984年刊行された『友情』（1920；馮朝陽訳、青海人民出版社）は同年周豊一訳の『友情』も人民文学出版社によって出版された。1989年『母与子』（霧鶴・雨鴻訳、太原北岳文芸出版社）が刊行された。1988年武者小路の隨筆『人生論』（浙江人民出版社）も世に出された。

武者小路実篤の文学と思想は、自然主義の掃き清めた地盤の上に発芽し、自然主義の平板な凡人主義と遠慮気兼ねを吹きとばし、赤裸々な自我を躍動させ、各人の自我を生かすことがそのまま万人の調和に通じる、と信じたところに特徴がある。彼の文学と思想の中心にある「自己」は、自己と人類、自己と自然、自己と運命のあるのを知って、その中間に存在する社会と政治と階級を見落しているのもあろう。しかし、その社会と政治と階級を主要テーマとした文学が幾度か蹉跌と転向に逢着したあとでは、とくにスターリン批判という世界史の事件を経験したあとでは、改めて見直されてきたとしてもゆえなしとしない。さらに、武者小路は中国侵略戦争中で軍国主義の狂熱な鼓吹者となったので、中国で冷遇にあったのは当然である。

（四）新感覚派などの翻訳

大正末期から昭和初期の文学の一流派である。雑誌「文芸時代」によった新進作家のグループをさす。新感覚派の文学運動は、1921（大正10）年頃の一応安定した小説の在り方に反抗したものである。当時は第一次大戦（大正3～7）後の世界的な変革期であった。その大戦後、西ヨーロッパの精神的危機の反映であるダダイズム、未来派、表現主義などの破壊的な思考と表現が

あり、もう一つはロシア革命の反映としてのマルクス主義の急進的な政治主義文学であった。新感覚派は主として前者の影響を取入れて文体革命を試み、プロレタリア文学は後者を取入れて文学を社会革命に結びつけた。外部の現実を主観的に把握し、知的に再構成した新現実を感覚的に創造しようとした。同人は横光利一・川端康成・中河与一・片岡鉄兵・今東光らであった。新感覚派の文学を本質的に自己のものとしていたのは横光利一であり、その新しい手法もまた彼の作り出したものであった。彼は新感覚派時代の自己の初期作品について「この時期には、私は何よりも芸術の象徴性を重んじ、写実よりもむしろはるかに構造の象徴性に美があると信じてゐた」と昭和16年になってから書いている。

新感覚派の代表的な作家横光利一（1898～1947）の作品は1929年郭建英によって訳された小説集『新郎の感想』がある。その中には『新郎の感想』の外に、『点火的紙煙』（『火の点いた煙草』1927）、『妻』（1925）、『園』が収録されている。1988年作家出版社によって刊行された『日本新感覚派作品選』には、川端康成（1899～1972）の『春天的景色』（『春景色』、葉渭渠訳）；楊曉禹訳の『少女之心』（『乙女の港』1938）・『孤兒的感情』（『孤兒的感情』1925）；横光利一の『蠅』（『蠅』1981；蘭明訳）、『頭与腹』（『頭ならびに腹』1924；唐月梅訳）、『太陽』（『日輪』1924；羅傳開訳）、『馬車載来了春天』（『馬車』1981；耿仁秋訳）、『機械』（1931；丁民・丹東訳）、『拿破崙与疥癬』（『ナポレオンと田虫』1969、高汝鴻訳）、『飛鳥』（『鳥』1981；山字訳）；片岡鉄兵（1894～1944）の『幽霊船』（『幽霊船』1932；斬叢林訳）、『鋼絲上の少女』（『綱の上の少女』（1927）、楊曉禹訳）；中河与一（1897～1994）作、谷学謙訳の『氷雪舞厅』（『氷る舞踏場』1925）・『刺繍蔬菜』（『刺繍せられた野菜』1924、）；十一谷義三郎（1897～1937）の『青草』（『青草』1924；沈迪中訳）；今東光（1898～1977）の『軍艦』（1924；陳泓訳）；佐佐木茂索（1894～1966）の『爺爺和奶奶』（『おぢいさんとおばあさんの話』1919；張扶柱訳）といった中短篇小説が17篇収録されている。上記の小説は殆どが新訳である。

1993年藤忠漢・王志平・宋崧・李軍訳の『上海故事』（『上海』1927～1930）が遼寧教育出版社によって刊行された。長編小説の『上海』は、「改造」にそれぞれ題を異にして断続連載した。昭七年、『上海』と改題、改造社刊である。昭和3年4月、上海滞在中の見聞に基づき、1924年（大正14）の五・

三〇事件に激動する上海に材をとったもので、横光はこの事件を「近代東洋史のうちでヨーロッパと東洋の最初の新しい戦ひである五三十事件」とし、「自分の住む惨めな東洋を知つてみたい」思いも、作意にあった。横光の最初の長編、最後の新感覚的表現で、作者自らも「最も力を尽した作品」と愛着する意欲あふれた傑作である。国際植民都市上海の混乱、不穩、頽廢のなかに、排外運動、紡績工場の罷業などにかかわる人物それぞれ、また群集の動き、街のさまを、貪婪旺盛な描写力に生かし、社会小説の面も含んでいる。当然、小説に描写された中国共産党への偏見や、正当な軍国主義の場面も横光の思想傾向が反映される。1998年李振声訳の『感想与風景—横光利一随筆集』が海南出版社によって刊行された。横光利一の思想や創作を理解するのに役立つ本であると考えられる。

日本の新心理主義は1930年（昭和5）ごろから32年ごろにかけて、フロイトの精神分析学やジョイス、プルーストラの20世紀文学の方法の影響を受けたわが国の文学者たちの間で「無意識」に対する関心が高まったとき、それを文学の題材、対象、文体などに積極的に取り入れて新しい文学を生み出そうとしておこった一傾向である。理論としては伊藤整『新心理主義文学』（1932）、作品としては伊藤整『感情細胞の断面』（1930）、横光利一『機械』（1930）、川端康成『水晶幻想』（1931）、『幽鬼の街』（1937）、『得能五郎の生活と意見』（1940～1941）、『火の鳥』（1949～53）などがあげられる。現代文学史上は、プロレタリア文学に対抗し、新感覚派を批判的に継承したモダニズム正統派の地位を与えられているが、概念規定、評価ともにまだ曖昧である。

1989年王智新訳の伊藤整（1905～1969）の小説『火鳥』（『火の鳥』1953）が「日本文学流派代表叢書」として四川人民出版社によって刊行された。だが、それを「唯美主義」に区分されたのは妥当ではないと指摘されている。

さらに、新興芸術派は1930年前後に反マルクス主義芸術を標榜してみずから「芸術派の十字軍」と名乗る「十三人倶楽部クラブ」が結成された。当時大勢力を誇ったプロレタリア文学に対抗して、新感覚派、モダニズム派、反マルクス主義者などが連合し、新しい芸術派を標榜したものである。川端康成、龍胆寺雄、嘉村磯多、岡田三郎、尾崎士郎らをメンバーとする「十三人倶楽部」が結成されて運動の中核となった。川端と横光利一がこの「大同団結」に参加していない。この派の主張の宣言というべき雅川の『芸術派宣言』

には、プロレタリア文学が「現実の切実」をそのまま芸術に持ち込んでいるのに対して、新しい芸術派は「反映の切実」という正しい芸術的認識を尊ぶという態度が表明されたが、内容的に立ち入った説明がなされるまでには至らなかった。雑誌『新潮』の編集長中村武羅夫の援助を受けて活動を開始したが、まもなく内部分裂を起し、みるべき成果をあげないまま終わった。しかし龍胆寺雄らを中心とするこうした動向の中から、創作集『十三人倶楽部』、『芸術派ヴァラエター』、『世界大都会尖端ジャズ文学叢書』などのほか、新潮社の『新興芸術派叢書』がある。代表作は龍胆寺雄（1901～1992）の『放浪時代』（1928）、『公寓里的女与我』（『アパートの女たちと僕と』1928）が挙げられる。1987年『意中人的胸飾』が「日本文学流派代表作叢書」の「新興芸術派集」として黒竜江人民出版社によって刊行された。小説集には、舟橋聖一（1904～1976）の『印染匠康吉』（『悉皆屋康吉』1941～1945；劉介人訳）、『意中人的胸飾』（『好きな女の胸飾り』1967；林少華訳）が収載されている。

五. 結語

本稿では日本文学研究とその翻訳から、新しい時代の日本文学の状況について述べていた。同時期の日本文学の翻訳実績を評価したとともに、その研究や翻訳における問題点も指摘している。特に日本文学史の研究は、言語や異文化への理解が限られて、基本的には日本人自身の研究レベルを超えていない。日本文学や翻訳作品への評価に関しては、感想的な叙述にとどまるだけで、文学作品の奥深さの評価分析に欠けていると考えられる。翻訳作品への評価も文学作品を総合的に叙述することがほとんどで、具体的な文学作品の分析や評価が不足すると見られる。時代別、作家別、流派別、風格別の文学作品に対しては、どのようにより深くて確かな分析を行い、新しい観点を提出するかということは、今後の日本文学とその翻訳を研究する上で重要な課題である。

注：

¹ 中国版本図書館編集、重慶出版社、1989。

² 原文は中国語で、筆者訳。

³ 1919～2018）俳人。埼玉県に生れた。昭和18年より日本銀行行員。21年「風」同人、37年より「海程」を創刊主宰する。32年ころより前衛的無季俳句に走った。句

集『少年』（昭30）、『金子兜太句集』（昭36）、『金子兜太全句集』（昭50、立風書房刊）、『遊牧集—金子兜太句集』（昭56）などのほか、『わが戦後俳句史』（昭60）など著書が多い。「銀行員等朝より蛍光鳥賊のごとく」。

⁴ 中国の教育者、翻訳家。『万葉集』をはじめ、日本文学の多くの作品を翻訳したが、第二次世界大戦後に文化漢奸として投獄された。

⁵ 近代中国を代表する芸術家であり、文学者、漫画家、美術音楽教育者、翻訳者など多彩な顔を持っている。1921年には日本へ留学して美術や音楽を学ぶが、そこで目にした竹久夢二の絵に影響を受け、それが情緒あふれる『子愷漫画』の基礎となる。文化大革命では他の知識人とともに批判の対象となり、制作禁止を命じられるなど不遇の時代もありましたが、1990年代に入って再び脚光を浴び、機知とユーモアに富んだ散文や漫画は中国国内にとどまらず、広く世界に愛されている。翻訳家としてはロシア文学などのほか、『草枕』や『源氏物語』の中国語訳でも知られている。

⁶ 1924年北京で創刊された週刊誌である。それを中心とする魯迅・孫伏園・周作人・錢玄同・劉半農・林語堂・俞平伯・顧頡剛などの文学者のグループが語絲派と呼ばれる。1926年以降、反動派に弾圧され同誌は停刊したが直ちに上海で復刊。1930年同人間の思想分化により廃刊した。いずれも新しいものの創造と古く有害なものの打破を主張した。

⁷ 1935年9月上海で発刊された雑誌である。林語堂等編集主幹。最初は月二回発行の雑誌で、後旬刊となった。抗日戦争期間広州、重慶などで出版され、「論語」「人間世」に次ぐブルジョアの文芸刊物、1947年停刊。

⁸ 1982年創刊した日本文学季刊雑誌で、吉林人民出版社出版。

⁹ 明治18年(1885)、尾崎紅葉・山田美妙・石橋思案らが結成した文学結社。機関紙「我楽多文庫」を発行。巖谷小波・広津柳浪・川上眉山・泉鏡花・小栗風葉らが前後して加わり、明治20年代の文壇の主流となった。

¹⁰ 文芸雑誌。1895～1933年博文館発行。石橋思案らの編集。既成の大家の作品をそろえて、商業文芸誌として発足。花袋・鏡花・一葉ら新進の作品も掲載して一時代を画したが、次第に大衆雑誌化した。

¹¹ 1890年(明治23)2月1日、徳富猪一郎(蘇峰)が創刊した日刊紙。当初青年層の圧倒的人気を得ていたが、日清戦争後、蘇峰が桂太郎に接近したため、かわって官僚、軍人の支持を得るようになり、その論調は政界に大きな影響力をもった。1905年には日露講和条約支持で、1913年(大正2)の憲政擁護運動でも桂内閣を支持して民衆の襲撃を受けたが、根強い蘇峰信者の支援を得て紙勢は衰えず、大正中期には20万～25万部を維持した。しかし関東大震災(1923)で社屋、印刷所が被災、経営は苦しくなり、根津嘉一郎の援助を受けたが、蘇峰と意見があわず、1929年(昭和4)蘇峰は退社した。以後、経営者の交替相次ぐが、新聞統合で『都新聞』と合併、1942年10月『東京新聞』となる。

¹² 1821～1867、フランスの詩人。象徴派の先駆者。詩集「悪の華」で近代人の孤独・苦悩をうたい、近代詩に革新をもたらした。ほかに散文詩「パリの憂鬱」、美術評論「ロマン派芸術」など。

¹³ 1839～1894、イギリス・ヴィクトリア朝時代の文学者・評論家・批評家・随筆家・小説家である。主な著作に『ルネサンス』、『享楽主義者マリウス』、『想像の肖像』、『鑑賞批評集』、『プラトンとプラトニズム』などがある。

¹⁴ 大正・昭和戦前期の代表的総合雑誌。1919年（大正8）改造社（山本実彦主幹）の創刊。第一次大戦後の改革機運の高まりの中、急成長をとげた。横浜事件にまきこまれ、廃刊を命じられる。第二次大戦後復刊するが、55年（昭和30）廃刊。

¹⁵ 1918年11月14日、白樺派の文学者武者小路実篤らによって、宮崎県木城村（現木城町）に設立された農業協同集落。先立って7月機関紙「新しき村」を創刊。労働と芸術活動の調和を理想の生活として、互いの個性を尊重する共働共生をはかり、社会的な反響を呼ぶ。自然主義から脱却し、理想主義文学を志した武者小路の現実的具体的な表現であり、1926年に一身上の都合で村外会員となるまで、彼自身もここに住んだ。1939年ダム工事により水田を失い、村は埼玉県毛呂山町に移転した。

参考文献

1. 王向遠「日本文学漢訳史」 寧夏人民出版社 2007年
2. 康東元「日本近・現代文学の中国語訳総覧」 勉誠出版 2001年
3. 葉渭渠・唐月梅「日本文学史（近代巻・現代巻）」 経済日報出版社 2000年
4. 葉渭渠・唐月梅「日本文学史・古代巻（上下）」 昆仑出版社 2004年
5. 葉渭渠・唐月梅「日本文学史・近古巻（上下）」 昆仑出版社 2004年
6. 王曉平「近代中日文学交流史稿」 湖南文芸出版社 1987年
7. 伊藤整「近代日本の文学史」 夏葉社 2012
8. 安藤宏「日本近代小説史」 中公選書 2015